

開催地名：大分県大分市	
開催日時	令和元年8月27日（火） 13：30～14：30
開催場所	J：COM ホルトホール大分
語り部	仲條 富夫（千葉県旭市）
参加者	自主防災組織代表者、自治委員、防災士等 約600名
開催経緯	<p>当市では、近年大きな災害が起こっていないこともあり、市民の災害に対する危機意識が低い。（特に若年層）南海トラフ巨大地震による被害が想定されており、啓発に取り組んでいるが、過去に津波襲来の経験もないため、被災者の経験を直に聞くことが重要と考えている。今回の語り部講演では、東日本大震災の体験談、教訓についてお話いただき、意識の向上につなげたい。</p>
内容	<p>（１） 大震災の当日の状況</p> <p>東日本大地震が発生してからおよそ1時間後、津波第一波が襲来して自宅の中まで被害を受けた。2階建て家屋の1階に、当時88歳の寝たきりの母親がいたが、そのベッドが特殊な構造のおかげでびくとも動かず、それが幸いして母親は無事だった。それでも、家屋自体はひどい状況であった。その後の第二波の襲来は免れたため、近隣住民の救助へ向かうも、更に襲来した第三波の津波に巻き込まれて自身が流されてしまった。幸いにも、近所の魚屋の建物のサッシに引っかかり、九死に一生を得たというのが私の経験である。</p> <p>（２） 震災の体験談</p> <p>地震に限らずに各種災害が起こった時には、まず家族の安否が一番重要であると思う。いざと言う時に備えて、緊急時に落ち合う場所を事前に決めておくことは大切である。お互いの所在確認の他、持ち出す物資の場所についても明確にしておく必要がある。自分と家族の安全が確認できたら、その次に近所において、自力で動けない方や弱者の対応を行う必要がある。</p> <p>あわせて、災害に限らず、何かあったらすぐに行動に移せるように地域ぐるみで集合訓練を重ねておくといい。災害が発生した場合、行政の対応はどうしても遅れる傾向にあるので、災害発生後72時間後くらいまでは自分たちで頑張る必要がある。（その後によりやく態勢が整って公助が入るとというのが実際である）そのため、公助が入るまでは他所からきたボランティアの方々に頼るケースが出てくると思うが、ボランティアの方々の受け入れ態勢、指示命令系統の確立などの準備も必要である。当時のことを思い起こすと、つくづくそのように感じる。</p> <p>そして、地域において自主防災のために必要な備品の購入や、そのための予算の確保については、個人では対応ができないので、近隣住民がまとまって、自治会長や消防団などと協力して申請する必要がある。近隣住民、自治会長、消防団との日</p>

常的な連携や情報共有によって、災害発生後に届く支援物資の配給についてもスムーズに事が運ぶので、是非とも地域におけるシステム作りに取り組んでほしい。

その支援物資の配給の目途がある程度立つと、今度はコンビニ、スーパー、ガソリンスタンドに人が殺到し、十分な量があるにもかかわらず、「またすぐに災害が来て、品物が無くなったらどうしよう」という精神状態に陥り、必要も無いのに通常以上の量を買占めるといった事態が数多く発生した。そのために、本当に必要な方に行き渡らないケースも多く見受けられた。奪い合うのではなく、お互いに譲り合う精神を持たないといけない。奪い合いは更に状況の悪化を生むだけである。

最後に、地震に限らず、各種災害が襲った際には「自分は逃げなくても大丈夫」と過信はせずに、各種メディア等の情報を参考にして、自主的に早め早めの避難を是非心がけていただきたい。

(3) 震災を体験して

実際に被害に遭うと、お互いにかける言葉は決まっているが、いざという時になるとその言葉が出てこなくなる。茫然とした状態になり、元気がなくなってしまう。従って、何かしら、一言でも良いのでお互いに声かけをし、励まし合っていくことが復興に向けての第一歩につながると思う。



開催地より

被災された方の生の体験談を聞くことができ、発生当時の状況について臨場感をもって共有できたと思う。ここで聞いたこと、学んだことを参考にして、更なる防災対策に取り組む必要があると改めて感じた。